

第6節 委員による所見

第6節では、本企画分析会議の4人の委員が、それぞれの専門的見地や調査結果をもとに、青少年の薬物乱用防止のための効果的対策についての所見を述べる。

アメリカにおける「薬物使用と健康に関する全米調査」:

本調査と比較するための素材として

中央大学法学部教授 藤本 哲也

1. 「青少年の薬物乱用に関する調査」の概要

平成21年度インターネットによる「青少年の薬物乱用に関する調査」の結果は、本報告書において示されている通りであるが、要約的に述べれば、まず、「青少年の薬物に対する意識や実態について」は、年代が高くなるほど薬物への関心が高くなっていることが示されている。しかしながら、「関心がある理由」に関しては、10代、20代では、薬物問題が市民生活の安全の基本に係るという認識や、青少年の健全育成に悪影響があるといった社会的な認識は30代と比べて顕著に低いようであり、どちらかといえば、昨年来の著名人の薬物問題に象徴されるように、マスコミ等での話題による関心の惹起が10代、20代には高いようである。

「薬物に関する知識の情報源」に関しては、全体として10代が最も多く薬物の影響を理解しており、その情報源は指導要領に基づく学校での指導や薬物乱用防止教室である。このように、学校教育や啓発などで薬物の心身に与える影響に関する知識は間違いなく浸透してきているにもかかわらず、本調査によれば、青少年の規範意識はやや弱く、また、断りきれない可能性を認めている青少年が少なからず存在していること、薬物乱用に対する規範意識が低い層では薬物乱用の危険性が非常に高いことが示されている。学校や学校以外での教育・啓発の一層の充実が問題解決のための手掛かりの1つといえそうである。

本調査で注意しなければならないのは、今までに薬物を使ってみたいと思ったことがある10-20代が55人(10-20代の6.7%)いたという事実である。使ってみたい理由は、「好奇心」(40人、72.7%)が最も多く、次いで「面白半分」(16人、29.1%)、「疲れをいやすため」(14人、25.5%)である。薬物が個人にとってより身近な存在となっていることを示唆するデータであるとも考えられる。

「効果的な薬物乱用防止教育・啓発」としては、10代、20代、30代以上とも、第1位が「高等学校までの学校教育」、第2位が「家庭教育」、第3位が「各種メディアを活用した啓発や教育」であり、「薬物乱用をした青少年を立ち直らせるための支援」については、10代、20代、30代以上とも、第1位は「家庭」、第2位は「友人」、第3位は10代、20代が「地域社会」、30代以上では「医療機関」である。

本調査はインターネットによる調査であるために、その調査結果については代表性に若

干問題を残すが、問題の所在や今後の課題や傾向を把握するための資料として、活用することは可能である。ちなみに、回答者の割合は、内閣府の「薬物乱用に関する世論調査」(平成18年)とほぼ同じ傾向が得られている。

同様の調査は、アメリカにおいても毎年実施されている。しかし、アメリカの調査は、日本の調査とは違い、実際に使用経験を問うものであり、それゆえに、アメリカでの薬物乱用問題は、日本よりも極めて深刻なものであるといえよう。

ここで紹介するアメリカの最新の調査は2009年9月に行われたものであり、304頁に及ぶ膨大なものである。以下においては、今回の「青少年の薬物乱用に関する調査」結果と比較可能なデータを拾い集めて、アメリカにおける「薬物使用と健康に関する全米調査」の結果の一部を紹介してみたいと思う。彼我の差が明らかとなるであろう。アメリカの調査があまりにも深刻なものであるがゆえに、日本の調査が軽視されることのないように留意して欲しいと思う。

2. アメリカにおける「薬物使用と健康に関する全米調査」の概要

「薬物使用と健康に関する全米調査」(National Survey on Drug Use and Health: NSDUH)は、違法薬物の使用に関する9つのカテゴリー、すなわち、マリファナ、コカイン、ヘロイン、幻覚剤、吸入剤の使用、そして処方薬形態である鎮痛剤、精神安定剤、興奮剤、鎮静剤の非医療的な使用についての情報を入手している。これらのカテゴリーにおいて、ハッシシュはマリファナに包含され、クラックはコカインの一形態と考えられている。LSD、PCP、ペヨーテ、メスカリン、シロサイピン・マッシュルーム、エクスタシー(MDMA)を含むいくつかの薬物は、幻覚剤のカテゴリーのもとに分類されている。吸入剤は、亜酸化窒素、亜硝酸アミル、洗浄剤、ガソリン、塗料スプレー、その他のエアゾールスプレー、接着剤のような様々な物質を含んでいる。処方薬形態の薬物(鎮痛剤、精神安定剤、興奮剤、鎮静剤)は、処方箋によって利用可能な多数の医薬品を含むものである。それらの薬物は、また、興奮剤のもとに分類されるメタンフェタミンのように、当初は処方箋医薬品であったが、現在では違法に製造され流通している可能性がある薬物を含んでいる。

回答者は、これらの薬物については、「処方箋なしで使用すること」と定義されている、「非医療的な」使用のみを報告すること、また単に、その薬物がもたらした経験や感情を報告することが要求されている。処方箋なしで販売可能な薬物の使用や、処方箋薬物の合法的使用は含まれない。NSDUHは、4つの処方薬形態の薬物グループを、「心理療法薬物」と呼んでいる。

NSDUHによって報告された「違法薬物の使用」の統計は、上に列挙した9つの薬物カテゴリーのうちのいずれかの薬物の使用に関するものである。アルコールとたばこの使用は、青少年にとっては違法であるが、これらの統計には含まれていない。

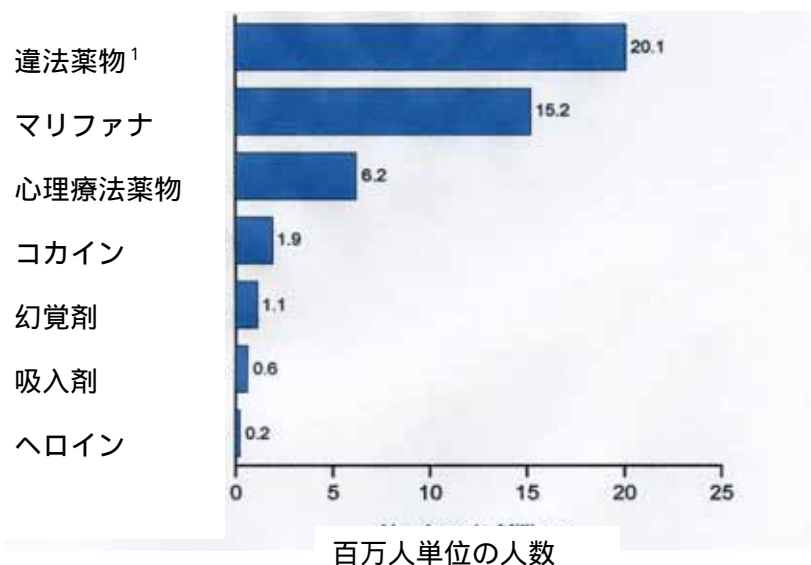
また、この全米調査においては、処方薬形態の心理療法薬物と処方薬の興奮剤の統計を

包含しているが、その統計においては、2005年にNSDUHで調査が開始され、その際に付け加えられた調査事項から得られた情報に基づく、メタンフェタミンの使用に関するデータも包含されている。そして、これらの事項についてはデータが集計されなかった初期の年代の薬物調査についての統計は、現在の統計と比較できるように調整されている。

さらなる情報が必要な場合には、2007年NSDUH全米調査結果報告書のB4.6節を参照（2008年応用研究室[Office of Applied Studies: OAS]）されたい。全米調査結果報告書における興奮剤と心理療法薬物の非医療的な使用についての統計は、2007年以前のNSDUHの調査報告における統計とは比較することができず、全米調査結果報告書におけるメタンフェタミンの使用も、また、2006年以前のNSDUHの調査報告の統計とは比較することができないのである。

今回の全米調査によると、2008年において、2,010万人の12歳以上のアメリカ人が、ここ1か月の間において違法薬物を使用しており、それは、調査対象者が調査インタビュー前の1か月の間に、違法薬物を使用したことを意味するものである（図表1.1）。ちなみに、この統計は12歳以上の人口の8.0%であることを意味している。

図表1.1 2008年において12歳以上の者が、ここ1か月の間に、違法薬物を使用した割合



注：違法薬物には、マリファナ/ハッシュ、コカイン（クラックを含む）、幻覚剤、吸入剤、処方薬形態の心理療法薬物の非医療的使用を含む。

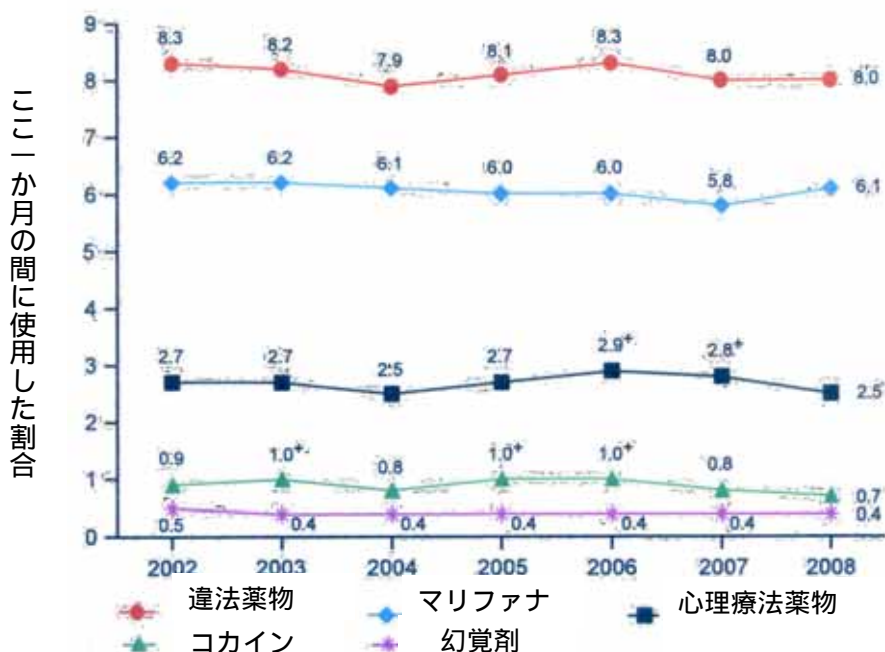
2008年における12歳以上の者の間で違法薬物を使用している全体的な割合(8.0%)は、2007年における割合と同様であり、2002年(8.3%)から一定の数値を保っている(図表1.2)。

マリファナは、最も一般的に用いられている違法薬物である(ここ1か月の使用者は、1,500万人である)。2008年では、マリファナは現時点で違法薬物を使用している者の

75.7%によって用いられており、それらのうちで 57.3%はマリファナを唯一の薬物として用いている。マリファナ以外の違法薬物は、12 歳以上の違法薬物使用者の 860 万人、すなわち 42.7%の者によって用いられている。マリファナ以外の他の薬物の現時点での使用は、違法薬物使用者の 24.3%と報告されており、18.4%の者はマリファナとその他の薬物を両方使用している。

12 歳以上の者のうち、2008 年に、ここ 1 か月の間にマリファナを使用した者の全体の割合（6.1%）は、2007 年の割合やそれ以前の年代の割合と近似しており、2002 年の数値に戻っている（図表 1.2）。

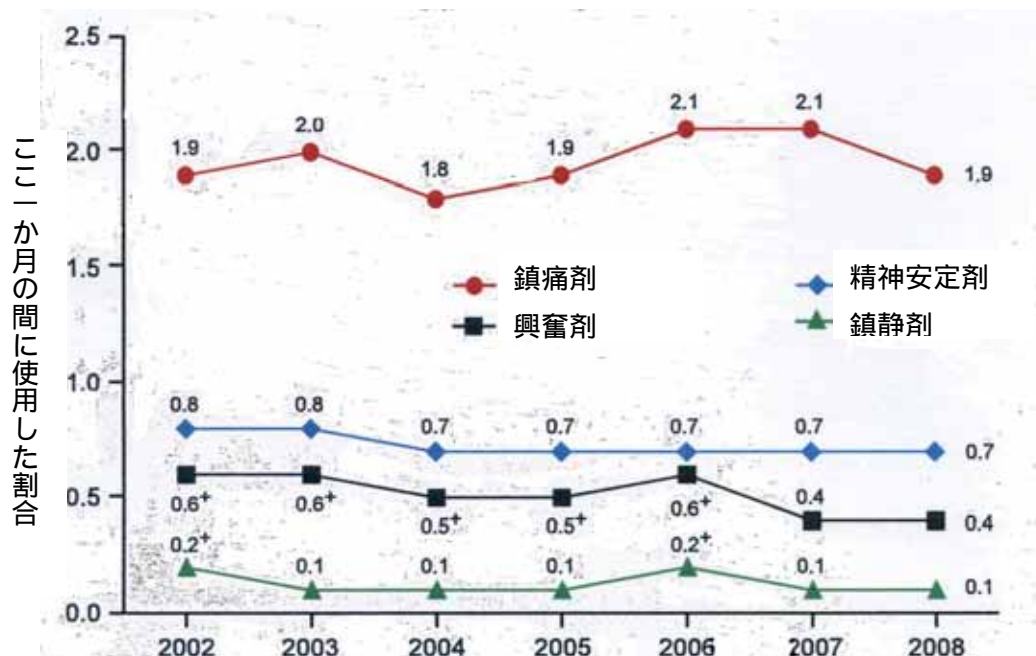
図表 1.2 2002 年から 2008 年までの間に 12 歳以上の者が、ここ 1 か月の間に、特定違法薬物を使用した割合



また、12 歳以上の 860 万人（3.4%）が、2008 年においてマリファナ以外の違法薬物を現時点で使用している者である。これらの大多数の者（620 万人、すなわち人口の 2.5%）は、心理療法薬物を非医療的に用いていた。また、470 万人が、2008 年に、ここ 1 か月の間に非医療的に鎮痛剤を用いており、180 万人が精神安定剤を、90 万 4,000 人が興奮剤を、23 万 4,000 人が鎮静剤を用いている。

2008 年において、現時点で心理療法薬物を非医療的に使用している者の数と割合（620 万人、2.5%）は、2007 年における数と割合（690 万人、2.8%）よりも低かった（図表 1.2）。2007 年（2.1%）から 2008 年（1.9%）にかけての鎮痛剤使用者の割合の減少は、統計的にそれほど多くはないが、一定程度、心理療法薬物を現時点で使用している者の低い割合に寄与している（図表 1.3）。

図表 1.3 2002年から2008年の間に12歳以上の者が、ここ1か月の間に、心理療法薬物の非医療的使用を行った割合



注：この統計と2008年の統計との間の差は、統計的に0.5レベルの有意差である。

ここ1か月の間にメタンフェタミンを使用した者の数は、2006年から2008年にかけて半数以上減少している。その数は、2006年では73万1,000人、2007年では52万9,000人、2008年では31万4,000人であった。

2008年に、ここ1か月の間にコカインを使用した12歳以上の者の数と割合の統計（190万人、人口の0.7%）は、2007年の統計（210万人、人口の0.8%）と2002年の統計（200万人、人口の0.9%）と近似している。しかしながら、2008年のここ1か月のクラックの使用者の数と割合（35万9,000人、人口の0.1%）は、2007年のここ1か月のクラックの使用者の数と割合（61万人、人口の0.2%）よりも低く、2004年を除くその他の年はすべて、2002年の数値に戻っている。

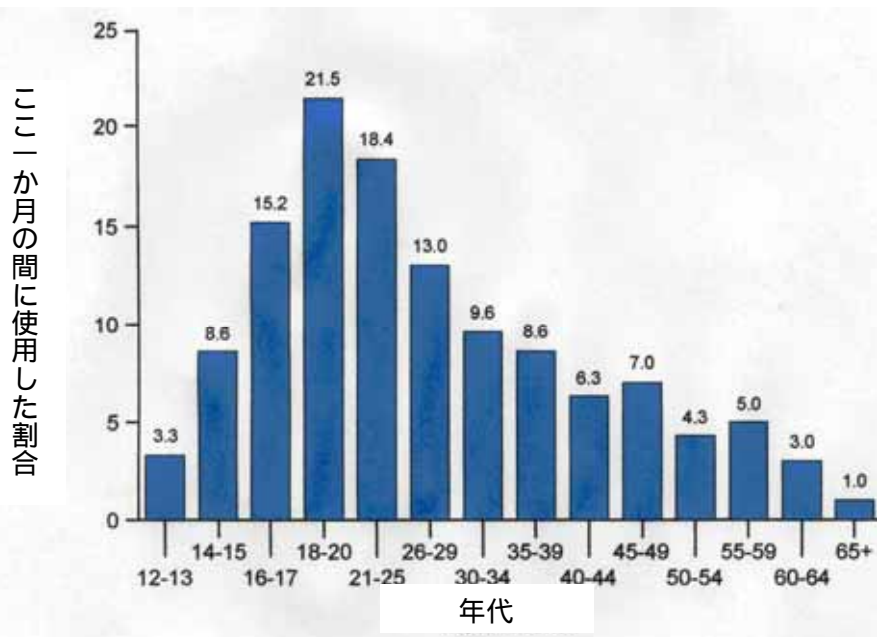
幻覚剤は、2008年では、12歳以上の者の110万人（0.4%）によって、ここ1か月の間に使用されており、それにはエクスタシーを用いた55万5,000人（0.2%）が含まれている。これらの統計は、2007年の数値と近似している。

2007年から2008年にかけての現時点でのLSDの使用は一定しているようであるが、LSDのここ1年間の使用は、62万人から80万2,000人まで増大しており、これは2003年、2004年、2005年、2007年の数値よりも高いが、2002年のここ1年間の使用者99万9,000人よりも低い数値である。

ここ1か月における違法薬物の使用の割合は、年齢によって変化している。2008年における12歳から17歳までの青少年の間での現時点で違法薬物を使用している割合は、12歳、

13歳の3.3%から、14歳、15歳の8.6%、16歳、17歳の15.2%まで増大している（図表1.4）。最も高い割合は18歳から20歳までの者であった（21.5%）。その他の割合は、21歳から25歳については18.4%、26歳から29歳については13.0%であった。65歳以上の割合は1.0%であった。

図表1.4 2008年において、12歳以上の者が、ここ1か月の間に違法薬物を使用した割合



2008年では、26歳以上の成人は、12歳から17歳までの青少年や18歳から25歳までの青年よりも、現時点での薬物の使用者となることが少ない傾向にある（それぞれ5.9%対9.3%、19.6%）。しかしながら、12歳から17歳までのグループにおける薬物使用者（230万人）と18歳から25歳までのグループ（650万人）を合わせた数よりも、26歳以上の者（1,130万人）に多くの薬物使用者が存在しているようである。

現時点での違法薬物の使用は、12歳から17歳までの青少年、18歳から25歳までの青年、26歳以上の成人の間では一定の数値を保っている。しかしながら、2002年から2008年まで、12歳から17歳までの間での現時点で違法薬物を使用している割合は、11.6%から9.3%まで減少しているのである（図表1.5）。

2008年では、12歳から17歳までの青少年の9.3%が、現時点での違法薬物の使用者であった。6.7%がマリファナを、2.9%が処方薬形態の心理療法薬物の非医療的使用にかかわっており、1.1%が吸入剤を、1.0%が幻覚剤を、0.4%がコカインを使用していた。

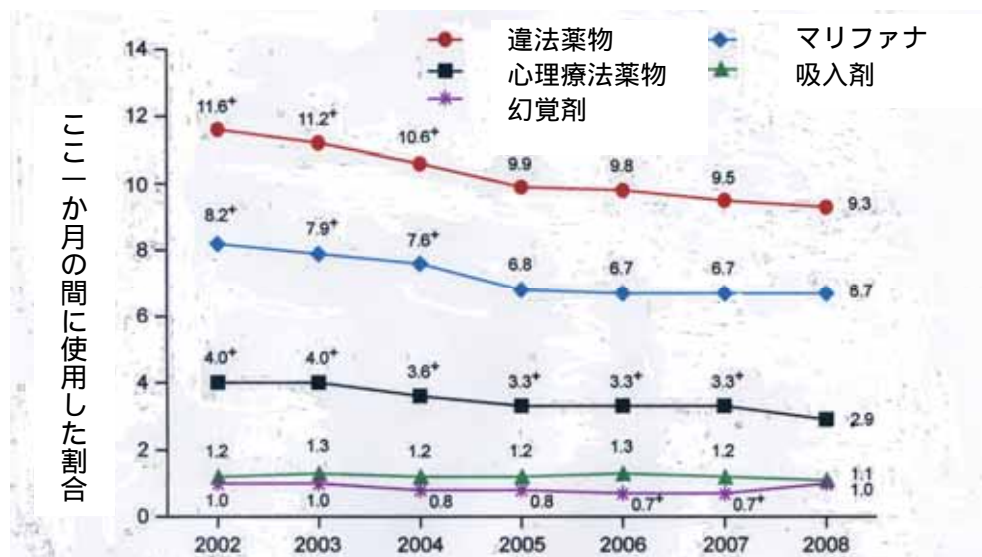
12歳から17歳までの青少年の間では、ここ1か月の間での薬物使用の形態は、年齢グループによって変化している。12歳から13歳までの間では、1.5%が処方薬の非医療的使用を、1.2%が吸入剤を、1.0%がマリファナを使用している。14歳から15歳までの間では、マリファナは最も一般的に使用されている薬物であり（5.7%）、次いで処方薬の非医療的使

用（3.0%）、吸入剤（1.3%）、幻覚剤（1.0%）である。マリファナは、また、16歳から17歳までの青少年の間で最も一般的に使用されている薬物である（12.7%）。マリファナに次いで、処方薬の非医療的使用（4.0%）、幻覚剤（1.6%）、コカイン（0.7%）、吸入剤（0.7%）の順に多く使用されている。

現時点で違法薬物を使用している全体的な割合は、12歳から17歳までの青少年の間では、2007年から2008年にかけて一定しており、幻覚剤と心理療法薬物の非医療的使用を除く、大部分の特定の薬物の割合についても同様である。ここ1か月の間に幻覚剤を使用した割合においては増加がみられ、2007年の0.7%から2008年の1.0%となっており、それは一部分、エクスタシーの使用が0.3%から0.4%増大したことによるものである。しかしながら、青少年の間の処方薬形態の心理療法薬物の非医療的使用の割合は、2007年の3.3%から2008年の2.9%と減少しており、その多くは鎮痛剤の乱用が2.7%から2.3%と減少したことによるものである。

2002年から2008年にかけて、12歳から17歳までの青少年の間において、現時点で違法薬物全体を使用している割合と、マリファナ（8.2%から6.7%）、コカイン（0.6%から0.4%）、処方薬の非医療的使用（4.0%から2.9%）、鎮痛剤（3.2%から2.3%）、興奮剤（0.8%から0.5%）、メタンフェタミン（0.3%から0.1%）を含むいくつかの特定の薬物を使用している割合が、かなり減少している（図表1.5）。違法薬物全体についての割合は、2002年では11.6%、2003年では11.2%、2004年では10.6%、2005年では9.9%、2006年では9.8%、2007年では9.5%、2008年では9.3%である。

図表1.5 2002年から2008年において、12歳から17歳までの青少年が、ここ1か月の間に特定の違法薬物を使用した割合



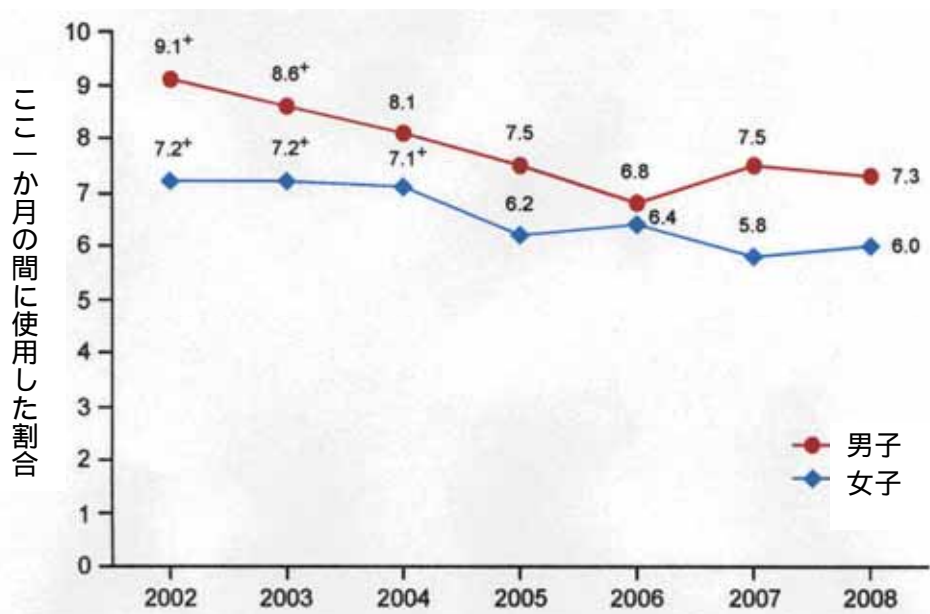
注：この統計と2008年の統計との間の差は、統計的に0.5レベルの有意差である。

12歳から17歳までの間で、現時点でマリファナを使用している者の割合は、2002年の8.2%から2006年の6.7%に減少しており、2007年と2008年においても、同様のレベルにとどまっている。ここ1か月の間のマリファナの使用については、2002年と2008年の間においてかなり減少している（20.6%から16.5%）。

2008年において、12歳から17歳までの青少年の間の男子と女子では、現時点での違法薬物（男子：9.5%、女子9.1%）、コカイン（男子：0.5%、女子：0.3%）、幻覚剤（男子：1.1%、女子0.8%）、吸入剤（男子：1.1%、女子：1.1%）の使用の割合が近似している。しかしながら、現時点でのマリファナの使用は、青少年女子（6.0%）よりも青少年男子（7.3%）の間でより多くみられる（図表1.6）。他方で、12歳から17歳の間の心理療法薬物の非医療的使用は、青少年男子（2.5%）よりも、青少年女子（3.3%）の方が多くあり、鎮痛剤の非医療的使用についても同様である（男子：2.0%、女子：2.6%）。

12歳から17歳までの間で、ここ1か月の間マリファナを使用している者の割合は、2002年の9.1%から2006年の6.8%まで減少している（図表1.6）。2008年では、その割合は7.3%であり、それは2006年の割合とそれほど異なるものではないが、2002年の割合よりも低いものとなっている。青少年女子の間での現時点でのマリファナの使用については、2002年から2004年にかけてはわずかな変化しか生じていないが、その後、その割合は減少し、2008年の割合（6.0%）は2002年の割合（7.2%）よりも低い。

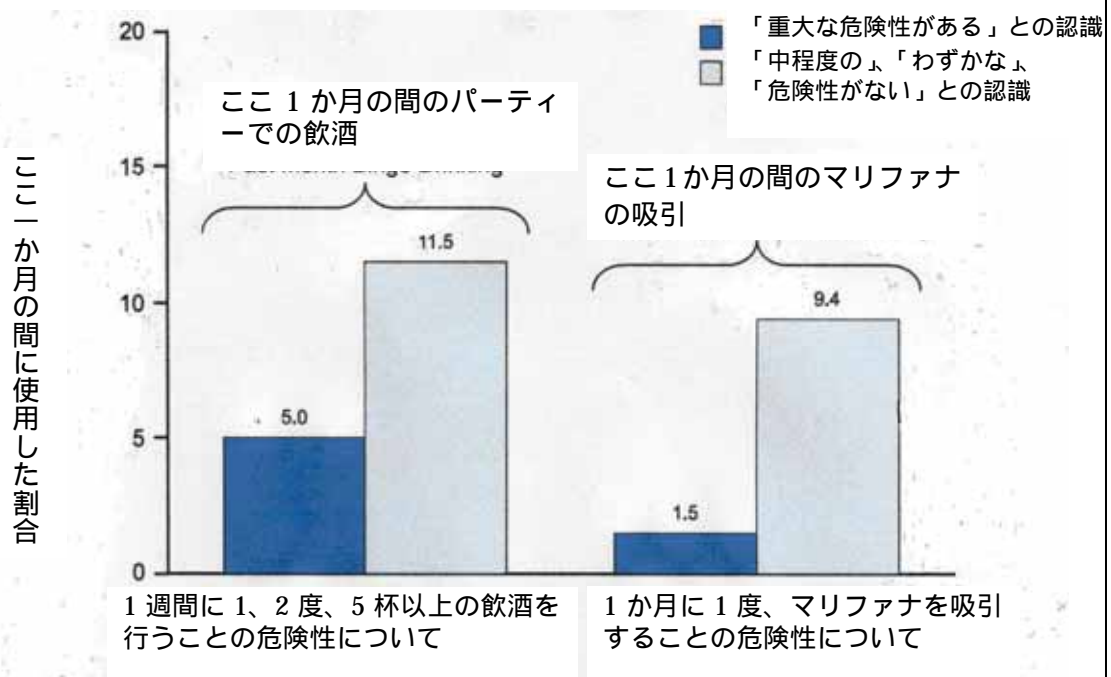
図表 1.6 2002年から2008年において、12歳から17歳までの青少年が、ここ1か月の間にマリファナを使用した割合（性別）



注：この統計と2008年の統計との間の差は、統計的に0.5レベルの有意差である。

ここ1か月の間におけるパーティーでのアルコールの使用、たばこ、マリファナの使用を報告した青少年の割合は、これらの物質の使用の重大な危険性を認識していない青少年よりも、これらの物質の使用の重大な危険性を認識している青少年において、低い数値がみられた。たとえば、2008年では、「1週間に1、2回アルコール飲料を5杯以上飲むこと」は重大な危険性があると認識している12歳から17歳の青少年の5.0%が、ここ1か月の間においてパーティーでアルコールを使用（ここ30日の間に、少なくとも1日、アルコール飲料を5杯以上消費する）しており、それとは対照的に、ここ1か月の間にパーティーでのアルコールの使用を報告した11.5%の青少年は、1週間の間にアルコール飲料を5杯以上飲むことは、中程度の危険性、わずかな危険性、危険性がまったくないと認識しているようである（図表1.7）。ここ1か月の間のマリファナの使用は、1.5%の青少年によって報告されており、それらの青少年は月に一度マリファナを吸引することは重大な危険性があると認識しているが、それに対して、ここ1か月の間にマリファナを使用した9.4%の青少年は、月に一度マリファナを吸引することは中程度の危険性、わずかな危険性、危険性がまったくないと感じている。

図表 1.7 2008年において、12歳から17歳までの青少年がここ1か月の間にパーティーで飲酒やマリファナの吸引を行った割合



3 . 結語

以上、アメリカにおける「薬物使用と健康に関する全米調査」の結果をごく簡単に概観したが、報告書そのものが膨大な資料から構成されているので、詳しくは英文資料を参照していただきたい。わが国においても、本調査のような「青少年の薬物乱用に関する調査」を継続することにより、アメリカと同様に時系列的な比較が可能になることを期待したいと思う。現に薬物を使用している者を調査するというアメリカの手法と「寝た子を起こすな」という声が今も聞こえる日本とでは、彼我の差が明らかであろうが、薬物乱用の実態を知ることが、有効な対策を樹立するための基本的要請事項であることを、われわれは、改めてここで確認する必要があるのではあるまいか。

参考文献

U.S. Department of Health and Human Services, Substance Abuse and Mental Health Services Administration, Office of Applied Studies, *Results from the 2008 National Survey on Drug Use and Health: National Findings*. Substance Abuse and Mental Health Services Administration, Office of Applied Studies, Division of Population Surveys, 1 Choke Cherry Road, Room 7-1044, Rockville, MD 20857, September 2009, pp.1-304.
<http://oas.samhsa.gov/nsduh/2k8nsduh/2k8Results.pdf>